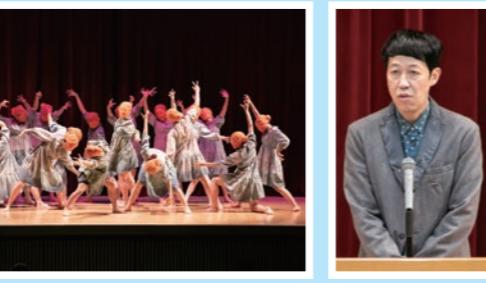


Topics ■トピックス [学内情報]

○関西大学北陽高等学校 創立100周年記念式典・祝賀会を挙行

「知徳体の調和」を胸に、さらなる100年へ！



2025年、関西大学北陽高等学校は100周年を迎えた。これを記念し、10月25日に同校体育館アリーナにて記念式典、ホテルニューオータニ大阪にて祝賀会を開催した。

北陽高等学校は1925年に北陽商業学校として開校。建学の精神「知徳体の調和のとれた人間の育成」を理念に掲げ、質実剛健・文武両道を旨として教育を実践してきた。戦後は硬式野球部やサッカー部の活躍をはじめ、学業・部活動とともに多くの人材を輩出しながら、運営していた学校法人福武学園は2008年に関西大学と合併し、第2の関西大学併設校・共学校として新たなスタートを切った。

北陽高等学校の創始者・山岡倭氏は、「関西大学中興の祖」と言われる山岡順太郎氏のご子息であり、初代校長に就任した糸島実太郎氏も関西大学出身。この縁は、北陽高等学校が関西大学の併設校となり、「関西大学北陽高等学校」として新たな一步を踏み出す、永続的なつながりへと発展した。さらに、北陽高等学校の建学の精神は関西大学の教育理念と重なり合っており、両校は時代を超えて互いに発展を支え合う関係を築いてきた。



記念祝賀会の様子

併設校となり、関西大学北陽高等学校は中高一貫教育の推進や3コース制(特進アドバンス、文理、進学アスリート)を導入することで、特色ある教育を展開。生徒一人ひとりの個性や能力を最大限に伸ばす教育に注力するとともに、探究学習やグローバル教育を通して、自ら考え行動する生徒を育成している。これは、社会貢献や国際貢献ができる人材を社会に送り出すという、学校の目標に基づくもの。これまでに約3,500人の卒業生が関西大学へ進学しており、その永続的なつながりと教育成果の確かさも示している。

式典では、吹奏楽部や創作ダンス部の演奏・演舞に加え、PTAがタレントの小畠千豊氏(吉本興業)を招き、講演会を開催。「『育てられ』『育てて』育ちきってない僕が思ったこと」と題し、ユーモアを交えた小畠氏の経験談が語られた。また、その後の祝賀会では、学校関係者や同窓会とともに100年の歩みを振り返り、さらなる未来へ向けた展望を共有。盛大に創立100周年を祝した。

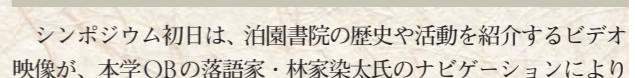
○「泊園書院」開設200周年記念シンポジウムを開催

関西大学の知的ルーツ、大阪ナンバーワンの学問所

10月24日と25日、「泊園書院開設200周年記念シンポジウム—泊園書院から関西大学のルーツをひもとく」を、梅田キャンパスにて開催した。

本学の知的ルーツの一つである泊園書院は、江戸時代後期の1825(文政8)年に藤澤東軒が大阪に開いた漢学塾。「泊園」は「さっぱりとした心持ちで学問にいそしむ学び舎」を意味し、「書院」は「私塾」を指す。その後、東軒の子孫である藤澤南岳、黄鶴、黄坡の歴代院主、及び石濱純太郎らによって維持・発展し、一時は「大阪ナンバーワン」と称される学問所として栄えた。1948(昭和23)年に閉鎖されるまでの間に学んだ門人は1万人以上とされ、各界にわたって優れた人材を輩出。大阪と日本の近代的な発展を根底から支えた。

4代院主・黄坡の死去により泊園書院は幕を閉じたが、その蔵書や収蔵品は本学に「泊園文庫」として一括寄贈され、漢籍を中心とする近世大阪文化の一大コレクションとなった。この寄贈をきっかけに、本学初の本格的附置研究所「東西学術研究所」が創設され、学術を受け継ぐ「文学部東洋文学科」の開設にもつながった。また、「泊園記念会」も設立されるなど、本学は泊園書院の伝統を受け継ぎながら、学問・教育の発展に取り組んでいる。



シンポジウム初日は、泊園書院の歴史や活動を紹介するビデオ映像が、本学OBの落語家・林家染太氏のナビゲーションにより上映された。また、黄金時代を築いたとされる第2代院主・南岳の功績を偲んで誕生した銘菓「南岳」が、事前に申し込んだ参加者に進呈された。

続く基調講演には、東京大学大学院総合文化研究科の高山大毅准教授が登壇。東軒による荻生徂徠研究について解説し、「東軒は徂徠の自筆書があると聞くと、所蔵者を訪ねて閲覧し、徂徠の書簡の相手に関する資料まで調べていた。その調査・分析の姿勢は、現代の研究にも通じるものがある」と、その学術的な先見性を評価した。

さらに、歴代院主が学問のみならず芸術にも造詣が深く、琴を嗜んだことにちなみ、東西学術研究所の山寺美紀子非常勤研究員が、七弦琴の演奏を披露。参加者は柔らかな音色に静かに耳を傾けた。

最後は、高山准教授、泊園記念会名譽会長の戸田貫名譽教授、泊園記念会会長の吾妻重二文学部教授らが登壇。泊園書院の特徴や意義について対談し、会場からの質問も交えて活発な議論を展開した。

翌25日にも多様な研究報告が行われ、多くの人が来場した。また、記念行事の一環として、同20日から11月15日まで、総合図書館展示室にて泊園文庫の貴重な資料を紹介する記念特別展示も開催された。



▲記念特別展示の様子



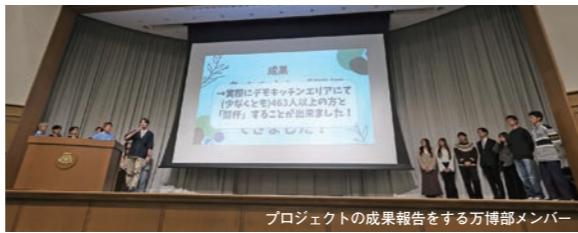
未来へつなぐ、大阪・関西万博での取り組み ＼やつたで、万博。／

○「関大万博部」が解散式を挙行。新団体「KU NEXPO」が始動

総勢140人の情熱が紡いだ「未来社会のデザイン」



「私たちがやらなきゃ誰がやる!」「万博のワクワク感を伝えたい!」——熱い志を抱き、2023年5月に20人で発足した大学公認の学生団体「関大万博部」が12月4日、その活動の集大成となる解散式を執り行った。最終的に総勢140人に拡大した同部は、「いのち輝く未来社会」の実現に向け、8つのプロジェクトを展開。



2025年には、夢洲会場での「夢洲関大Days」を通じたステージパフォーマンスや展示、体験企画、学内での「関大万博Weeks」など、計24件のイベントに参画した。7月には千里山キャンパスで「関大万博フェスタ～巡縁祭～」を成功させるなど、本学ならではの発信力と情熱で万博を軸としたさまざまな縁を育んだ。

解散式には、関大万博部の学生のほか、理事長・学長をはじめとする大学教職員、校友会関係者ら100人以上が出席。学生たちは激動の2年半の活動を振り返りながら、それぞれの挑戦の軌跡を報告した。

関大万博部 8つのプロジェクト

- 絵文字を使用して世界共通のコミュニケーションツールを開発する取り組み「エモジケーション」
- 非常食アレンジ弁当の開発に取り組んだ「未来の私たちへ」
- オリジナルのクラフトコーラ&ピールの開発を通じてコミュニケーションの活性化を図った「関杯」
- キャンパス内に万博海外パビリオンの疑似空間を演出し、国際交流・多文化共生を促進した「Welcome EXPO」
- 学生や地域向けの万博関連イベントを企画した「関大万博フェスタ」
- 学食で食の多様性を発信する万博メニューを開発した「関大EXPO食堂／KUDF」
- 子供たちの夢を応援し、挑戦する機会を創出した「ココミラ」
- 関大独自の万博機運醸成アイテムを製作した「関大万博グッズ製作」



同部は今後、「万博は閉幕からが、スタートだ」を合言葉に、レガシーを継承するフェーズへと移行する。団体名称を「KU NEXPO」に一新し、「人と人をつなぎ、アイデアとチャンスが交錯する場所を作る」ことを目指して、大阪に熱を届ける新たな挑戦へと歩みを進める。



▲万博会場フードコートで販売した非常食アレンジ商品「かんらぼサンド」

▲「TEAM EXPO」パビリオンの関大で共創チャレンジの成果を発表

○イタリア館のクロージングセレモニー「ワールド・イタリア・スポーツデー」に参画

万博からミラノ冬季五輪へ

関西大学は、10月13日に開催された大阪・関西万博イタリア館のクロージングセレモニー「ワールド・イタリア・スポーツデー」に参画した。

同イベントはミラノ・コルティナ2026冬季オリンピック・パラリンピックをテーマに、イタリア政府が世界各地で同時開催した国際的な企画。当日は、在大阪イタリア総領事館およびイタリア政府機関の主催により、イタリア陸軍音楽隊の演奏や2026年冬季五輪のムービー上映、政府代表者のスピーチなどが行われた。また、会場の特設スケートリンクでは、聖火トーチの引継ぎ式などが実施され、万博最終日にふさわしい華やかなフィナーレとなった。



本学からは卒業生アスリートとして、2018年平昌オリンピック代表の宮原知子氏と、2020年東京パラリンピック銀メダリストの和田伸也氏が登壇し、
▲卒業生アスリートの宮原知子氏(左)と和田伸也氏



競技を通じて得た経験や未来への思いを語った。そのほか、アイススケート部の学生3人がエキシビションに出演し、フィギュアスケートの演技を披露。式典のクライマックスを美しく彩った。

今回のセレモニーは、万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」と、オリンピック・パラリンピックの「平和と共生」の理念をつなぐものであり、聖火トーチの引継ぎや学生の演技は、未来に「希望のバトン」を渡す象徴的なシーンとなった。

○サウジアラビア館展示のサンゴ構造物を受贈

万博を機に「持続可能な海洋再生研究」を



▲リボーンチャレンジでの展示(右:化学生命工学部上田正人教授)

10月10日、大阪・関西万博サウジアラビア館で展示されていた3Dプリント製のサンゴ構造物約100体が関西大学に寄贈された。これらは紅海のサンゴ礁再生をテーマにした展示の一環で、実際のサンゴ骨格と同形状のレプリカをサンゴ由来の素材で3Dプリントして製作したもの。10月15日には、千里山キャンパスで受け渡しセレモニーが開催され、製作に用いられた3Dプリンター装置も寄贈された。これにより、本学でのサンゴ構造物の製作・量産が可能となる。



今回の国際連携は、8月5日～11日に大阪ヘルスケアアパリオンで開催された「関大リボーンチャレンジ」がきっかけとなった。本学主催で9社の企業と出展したところ、参画していた本学発ベンチャー・株式会社イノカの展示をサウジアラビア館のスタッフが視察。独自の「環境移送技術®」を用い、世界で初めて真冬のサンゴ人工産卵に成功した同社の実績が注目され、協力が実現した。

寄贈されたサンゴ構造物は、化学生命工学部の上田正人教授が開発した「サンゴポリープ定着技術」を用い、サンゴの細胞を移植・育成する共同研究に活用される。この研究には、株式会社イノカとサウジアラビアの大学・研究機関が参画。生命を宿さないサンゴ骨格に「命を吹き込む」新たな国際共同研究がスタートする。



▲株式会社イノカとサウジアラビアの大学・研究機関とともに始まった国際共同研究